



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

## <活動記録><研究活動> 2017年度先端社会研究所基盤研究部門活動報告

著者	三浦 耕吉郎, 鳥羽 美鈴, 鈴木 謙介
雑誌名	関西学院大学先端社会研究所紀要
号	15
ページ	175-181
発行年	2018-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00026916">http://hdl.handle.net/10236/00026916</a>

## ■ 活動記録 ■

## ◆ 研究活動 ◆

## 2017 年度先端社会研究所基盤研究部門 活動報告

## ◆ ソーシャル・ディスアドバンテージ班 (SD 班)

代表：三浦 耕吉郎（関西学院大学社会学部教授）

本研究班は、いまだ周縁化されている人びと（LGBT、薬害被害者、薬物依存者、病者、特定労働者、エスニック・マイノリティ、ホームレス、部落差別被害者、災害被災者、高齢者等々）のかかえているソーシャル・ディスアドバンテージ（社会的不利ないし不利益）の解明と、そうした人たちへの支援実践に関する研究をつうじて、「文化的多様性を尊重する社会の構築」に資することを目的としている。

2017 年度には、班として前年度より集中的にかかわっている HIV 陽性者・薬物依存者・統合失調症・LGBT への支援実践に取り組む「ケアカフェ・バザール」や、当事者の自助グループ「サロン・ド・バザール」への継続的な参与の試みの延長線上において、次の二つのイベントを企画した。一つ目は、「サロン・ド・バザール」に集う人びとによる座談会の実施である。これにより、当事者の方たちにとって居場所としての「サロン・ド・バザール」のもつ意味合いや、現代社会における彼ら／彼女らの生きづらさの内実について、当事者自身による語りを通じて一定程度、明らかにすることができた。

二つ目は、シンポジウム「エイズと日本社会、その 30 年の社会的経験」の開催である。このシンポは、1987 年の神戸エイズ・パニックから 30 年、そして陽性者の死亡率を劇的に改善した 1996 年の HAART（多剤併用療法）の開発から 20 年たった今日においても、いまだに HIV 陽性者を取りまいている偏見や差別をどのように払拭していくことができるのかについて、当事者（LGBT の HIV 陽性者、セックスワーカー、薬物使用者の HIV 陽性者）の支援に関わってきた方々にパネリストとしてご登壇いただき、支援者の直面する社会的困難の経験を私たちも共有したうえで共に考えていくことをめざしたものである。

これら二つの試みは、いずれも社会の現場に生きる人びとと研究者とのあいだで自由かつ双方向的なコミュニケーションを可能にする場を創出するという点において、研究活動の成果を社会に還元していくための一つの方向性を示したものである。

一方、今年度当班内における、ソーシャル・ディスアドバンテージとは何か、差別や排除とは何か、という根本的な問いをめぐる理論的な研究としては、次の二つを挙げることができる。

一つ目は、「なぜ、差別はいけないのか?」、換言すると、「そもそも、なぜ、その状態が差別とみなされうのか?」という問いにかんして、「ソーシャル・ディスアドバンテージ」のみならず、「ソーシャル・アドバンテージ」もまた、それらが過剰に付与される場合には差別に至ることがあるという斬新な観点が呈示された。すなわち、前者が極まったときの「見下し」「排除」「他者化」と、後者が極まったときの「聖化」「過剰包摂」「強い同化」という事態が共に差別を惹起する要因

となりうるという指摘である。これは、本研究班のテーマを格段に深化させる研究であるとともに、なぜ、人びとはある種の差別には低い感受性しか示さないのかを説明するうえで鍵となる理論枠組みを提供するものといえ、班として、この枠組みを用いた「社会意識としての差別認識にかんする Web 調査」を実施する。

もう一つは、「人は、どのように差別をしているのか？」という問いにはじまるもので、偶然的な社会的コンテキストや、社会関係の網の目にとらえられることによって、その気もないのに差別させられる「構造的差別」や、文化や経験の相違がもたらすディスコミュニケーションの生み出す差別を明らかにした。これらは、私たちがいる種の関係性のなかにおかれると、個々人における偏見や差別意識の有無とは無関係に、差別に加担させられたり、差別を引き起こしてしまうことがあるという点に着眼することによって、「関係的差別」という差別現象への新たなアプローチを提起している。

こうした新しい理論的な達成を、いかに具体的な問題の解決に応用していくかという点が、来年度へむけた次なる課題である。

#### ○開催したシンポジウム

2017 年度関西学院大学先端社会研究所シンポジウム

「エイズと日本社会、その 30 年の社会的経験」

日 時：2018 年 2 月 24 日（土）13:00～17:00

場 所：関西学院大学上ヶ原キャンパス図書館ホール

##### ・基調報告

大西赤人（作家、ヘモフィリア友の会全国ネットワーク副理事長）

##### ・シンポジスト

長谷川博史（特定非営利活動法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス理事）

要友紀子（セックスワーカーの健康と安全のために活動するグループ・SWASH 代表）

倉田めば（薬物依存リハビリテーションセンター大阪ダルクディレクター）

##### ・コメンテーター

花井十伍（大阪 HIV 訴訟原告団代表）

新ヶ江章友（文化人類学者、大阪市立大学准教授）

##### ・司会

佐藤哲彦（関西学院大学社会学部教授）

#### ○研究成果

##### (1) 学会発表

金明秀、「在日韓国人青年の民族的アイデンティティ：1993 年～2013 年のデータを用いて」、2017 世界韓人学術大会、2017 年 6 月 28 日、ソウル。

白波瀬達也、「あいりん地区に見る貧困の地域集中の功罪」、貧困研究会第 10 回大会、2017 年 12

月 11 日、大谷大学。

佐藤哲彦、「〈悪〉から〈害〉へ——ハーム・リダクションと逸脱処遇の現代的変容」、日本社会学会第 90 回大会、11 月 4 日、東京大学

## (2) 講演会

金明秀、「外国にルーツのある人達の生きづらさとは：レイシャル・ハラスメントについて考える」、大阪府在日外国人教育研究協議会 2017 年度記念講演会、2017 年 5 月 8 日、大阪市立港区民センター。

金明秀、「法務省による外国人住民調査の分析：ヘイトスピーチ解消法施行 1 年～その現状と課題、人種差別撤廃基本法の実現へ」、外国人 인권法連絡会・移住者と連帯する全国ネットワーク（移住連）・人種差別撤廃 NGO ネットワーク（ERD ネット）・のりこえねっと・ヒューマンライツナウ、2017 年 6 月 3 日、在日本韓国 YMCA。

金明秀、「法務省による外国人住民調査報告書を読み解く」、第 17 回多民族共生 인권研究集会、2017 年 7 月 10 日、大阪市立東成区民センター。

金明秀、「レイシャル・ハラスメントを考える」、鳥取市 인권交流プラザ、2017 年 7 月 21 日、鳥取市 인권情報センター。

金明秀、「レイシャルハラスメントについて」、ヘイトハラスメント裁判を支える会、2017 年 8 月 19 日、つるはし交流広場「ばだん」

白波瀬達也、「貧困と地域」、釜ヶ崎講座第 23 回釜ヶ崎講演のつどい、2017 年 12 月 2 日、エル大阪。

## (3) 著書

三浦耕吉郎、『エッジを歩くー手紙による差別論ー』、2017 年 10 月、晃洋書房（単著）。

三浦耕吉郎、『新社会学研究』第 2 号、2017 年 11 月、新曜社（共編著）。

## (4) 論文

金明秀、「재일코리아청년의 민족적아이덴티티－1993 년～2013 년의 데이터를 이용하여（在日コリアン青年の民族的アイデンティティ：1993 年～2013 年のデータを利用して）」、『재외한인연구』제 42 호（Studies of Koreans Abroad, No.42）、2017 年 9 月（査読付き）。

白波瀬達也、「多死社会化する寄せ場のエスノグラフィー 身寄りなく単身高齢者の暮らしと弔い」『現代思想』45(20)：pp.206-219、2017 年 10 月。

## ◆文化表象班

代表：鳥羽 美鈴（関西学院大学社会学部教授）

プロジェクトの 2 年目にあたる今年度は、昨年度に続き、文化の国際移動と表象の政治を研究テーマとして、フィールドワークを実施したほか、各班員が関連する資料の収集とそれらを読み込む作業に力を入れた。最新の情報収集や議論への参加のために、学会や研究会にも積極的に参加し

た。その概要と成果は下記の通りである。

#### ○フィールドワーク

大石太郎

調査地：カナダ（モントリオール、オタワ）、アメリカ合衆国（メイン州）

調査滞在期間：2017年6月23日－2017年7月4日

調査成果：カナダにおいてアイデンティティに関わる行事の参与観察をするとともに、オタワの国立図書館・公文書館やメイン州のメイン大学フォートセント校アカデミアン・アーカイブスで資料収集を行った。さらに、現地滞在中の日本人研究者との意見交換により、最近のカナダ事情等に関する情報を得ることができた。

#### ○研究成果

##### (1) 学会発表

鳥羽美鈴、「L'étude de la richesse culturelle de l'île」、Congrès mondial du Conseil international d'Études francophones、2017年6月29日、アンティル大学。

大石太郎、「カナダ、沿海諸州におけるアカデミアン文化と観光の発展」、日本地理学会、2017年9月29日、三重大学。

若松邦弘、「イギリス政治のなかの「移民」問題」、日本比較政治学会、2017年6月17日、成蹊大学。

鳥村恭則、「민속학이란 무엇인가? (民俗学とは何か)」、第38回実践民俗学会学術大会、2018年2月2日、韓国・東国大学校ソウルキャンパス。

##### (2) 講演会

鳥羽美鈴（招待）、「セネガルの言語と社会」横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院・公開講座、2017年7月14日、横浜国立大学。

若松邦弘（招待）、「イギリスの政党制における UKIP」、政策研究フォーラム研究会、2017年5月24日、友愛会館。

若松邦弘、「英国の EU 離脱とイギリス政治」、神奈川大学生涯学習・エクステンション講座、2017年5月26日、KU ポートスクエア。

若松邦弘、「不満票のゆくえとイギリス政治」、かわさき市民アカデミー、2017年10月30日、川崎市生涯学習プラザ。

若松邦弘、「イギリス政治の現況と対 EU 交渉」、明治大学国際総合研究所 EU 研究会、2017年12月22日、明治大学。

##### (3) シンポジウム

若松邦弘、「英国メイ政権の現状」、2017年10月24日、21世紀政策研究所。

(4) ワークショップ

若松邦弘、「Brexit とイギリス政治」、2017 年 12 月 8 日、国際問題研究所。

(5) 著書

鳥羽美鈴、「インド系英語作家にみる排除と包摂：ジュンパ・ラヒリを事例に」、関根康正・鈴木晋介編、『南アジア系社会の周辺化された人々－下からの創発的生活実践』明石書店、2017 年 4 月、pp.63-84。

大石太郎、「カナダの地勢－歴史の舞台－」、「フランス系移民－400 年を超える歴史－」細川道久編、『カナダの歴史を知るための 50 章』明石書店、2017 年 8 月、pp.20-25、248-253。

若松邦弘、「イギリスにおける『アジア系』市民の政治参加」、関根康正・鈴木晋介編、『南アジア系社会の周辺化された人々－下からの創発的生活実践』明石書店、2017 年 4 月、pp.21-40。

島村恭則、「民俗学とは何か－多様な姿と一貫する視点－」、古家信平編、『現代民俗学のフィールド』吉川弘文館、2018 年 2 月、pp.14-30。

(6) 論文

鳥羽美鈴、「Chinese Interns at Farms in Japan」、『Ewha Journal of Social Sciences』Vol.30, No.1, 2017 年 4 月。

荒山正彦、「図録『日中のかけはし－愛新覚羅溥儀家の軌跡－』」、関西学院大学博物館、2017 年 6 月。

大石太郎、「カナダにおける二言語主義の現状と課題」、『E-journal GEO』、日本地理学会、第 12 巻第 1 号、2017 年 6 月。

大石太郎、「ケベック州における英語話者の居住分布と言語環境への適応」、『ケベック研究』、日本ケベック学会、第 9 号、2017 年 9 月。

若松邦弘、「EU 離脱への対応とイギリス政治のジレンマ」、『国際問題』、第 670 号、2017 年 4 月。

若松邦弘、「二〇一七年イギリス総選挙の分析－国際的大都市と鉱工業地帯における支持の乖離」、『改革者』、第 58 巻 8 号（通巻 685 号）、2017 年 8 月。

島村恭則、「Folklore in the Midst of Social Change: The Perspectives and Methods of Japanese Folkloristics」、『Japanese Review of Cultural Anthropology』18 巻 1 号、2018 年 1 月。

島村恭則、「What is Minzokugaku?: An Introduction to Japanese Folkloristics」、『Kwansei Gakuin University School of Sociology Journal』128 巻、2018 年 3 月。

○博物館企画展

荒山正彦、「日中のかけはし－愛新覚羅溥儀家の軌跡－」、展示資料の提供（資料番号 34-49）と監修、2017 年 6 月 5 日－7 月 22 日、関西学院大学博物館。

○文化表象班 第 1 回研究会（共催ワークショップ）

日時：2017 年 4 月 6 日（木）14:30～16:00

場所：先端社会研究所セミナールーム

講演：ファリーバー・アーデルハーフ Fariba Adelkhah（パリ政治学院 研究主任）

題目：The Thousand and One Borders of Iran: Travel and Identity

概要：旅を社会実践ととらえ、ナショナル・アイデンティティの構造において「ディアスポラ」や「周縁」といったものがいかに重要な位置を占めるかを指摘。商人や労働者、学生、宗教者、官吏、専門家、亡命者などの旅を追跡し、イラン本国やドバイ、東京、ロサンゼルスなどのイラン人共同体の現地調査を行うなかで、イランの歴史や社会の複雑さが明らかにされ、さらにグローバル化が進行する世界における国境を越えた関係の場への注目を通じて、イラン・イスラーム共和国が再生産してきた国家イデオロギーの説明とは異なるイラン社会の発展を示した。

主催：日本学術振興会・課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業「グローバル社会におけるデモクラシーと国民史・集合的記憶の機能に関する学際的研究」

共催：関西学院大学先端社会研究所「文化表象班」

○文化表象班 第2回研究会（先端研セミナー）

日時：2018年2月15日（木）16:00～18:00

場所：先端社会研究所セミナールーム

報告：荒山正彦（文学部 教授）

司会：島村恭則（社会学部 教授）

題目：「近代日本における外地・植民地への旅行案内書とその地理的表象」

概要：およそ1890年代から1940年代初頭にかけて、台湾、樺太、朝鮮、満洲、南洋群島などへの旅行案内書が数多く出版された。本研究会では、それらの歴史的な系譜を概観し、旅行案内書にみられる外地・植民地の記述を、近代日本における地理的想像力の産物として整理を試みた。

## ◆食研究班

代表：鈴木 謙介（関西学院大学社会学部准教授／先端社会研究所副所長）

「食研究班」では、2017年2月に行った調査をもとに複数の講演、セミナーを行った。いずれも多くの方の来場があり、調査の成果を社会に還元するうえでよい場になったと思われる。また8月には韓国での現地調査を行い、当地で留学中の研究班メンバーである高原基彰とともに、ソウルの外食産業や社会状況についてのフィールドワークを行った。さらに昨年に引き続いて開催した勉強会では食研究の最新動向をフォローするとともに、参加した学生からの発案で、外部講師を招いてのセミナーも開催した。

○セミナー

題目：ラーメンから見る食とグローバル化

日時：2017年5月9日（火）16:50～18:20

講師：鈴木謙介

参加者：32 名

題 目：大学と教養の使い方

日 時：2017 年 12 月 8 日（金）16：50～18：20

講 師：大澤聡（近畿大学）、名部圭一（桃山学院大学）、鈴木謙介

参加者：75 名

#### ○研究成果

##### （1）学会発表

鈴木謙介、「ウェブ時代のコミュニケーション——〈多孔化〉した時代の中で」、日本コミュニケーション学会、2017 年 6 月 3 日、京都ノートルダム女子大学。

鈴木謙介、「欧州のラーメンから見る食とグローバル化」、日本社会学会、2017 年 11 月 4 日、東京大学。

鈴木謙介、「ウェブ時代のセルフ・デザイン論～SNS、インスタ映え、意識高い系～」、二松学舎大学人文学会大会、2017 年 12 月 9 日、二松学舎大学。

##### （2）講演

鈴木謙介、「世界のラーメンで考えるグローバル化」、西宮市木曜講座、2017 年 9 月 14 日、なるお文化ホール。

#### ○勉強会

食研究班の活動や研究課題をより広く周知し、また同様の関心を持つ学部生・大学院生と研究を深めるため、週 1 回の勉強会を開催した。2017 年度は 18 回の勉強会を開催し、毎回の参加者は 4～6 名であった。

#### ○海外現地調査

調査地：ソウル（韓国）

調査滞在期間：2017 年 8 月 14 日～16 日

調査者：鈴木謙介・高原基彰

東アジア地域の中でも外食に対して海外企業の進出のハードルが高いと言われるソウルでの現地取材を行い、外食産業の実態についてフィールドワークを行った。また当地に留学中の高原基彰のガイドにより、当地の社会状況についての現地調査を行った。